

阿川弘之
の本

阿川弘之の本

阿川弘之の本 ©1970

昭和四十五年三月十五日 初版発行

著者 阿川弘之

発行者 岩瀬順三

発行所 KKベストセラーズ

東京都千代田区内神田二の四の三

振替 東京一〇三〇八三

電話 東京二五二一五九九一(代表)

印刷 東洋印刷

製本 和田製本

〈検印省略〉

0095-111004-7617

阿川弘之の本

責任
編集

阿川
弘之

まえがき

一冊の中に短編小説も入っていれば、随筆、評論のたぐいも入っている、旅行記も童話も入っている。という、こんな本を出してもらうのは初めての珍しい経験である。しかも、著者の責任編集といふことなので、内容の取捨選択は私の自由に行なうことができた。

長い文筆生活のあいだに書き捨てたものの中には、縁がなくてそれまで一度も自分の著書に入る機会に恵まれなかったけれども、作者としては、できれば改めて人に読んでみてほしいと思っているような文章もいくつかある。

「あゝ同期の桜」「最後の海軍大将」「趣味のすすめ」をはじめ「小山清の死」「電話騒動」「安川加寿子」など、こまごました随想の多くは、そういう種類のもので、これにもう一度目の目を見させてやることができたのは、私として大変うれしい。この本は全体で、私という一人の小説家の一応の自画像といえるかも知れない。

「きかんしゃ やえもん」は岡部冬彦の絵、私の文で「岩波の子どもの本」の一冊として、昭和三十四年以来刊行中の童話であるが、岩波書店の諒解を得て文章だけ今回この本に収録させてもらった。

昭和四十五年二月

阿川弘之

目次

小説

夜の波音 8

鱸とおこぜ 39

末っ子 57

水の上の会話 80

随筆 1

「あゝ同期の桜」に寄せる 112

最後の海軍大将 125

文人海軍の会 138

ほんとの軍歌はきかなくなった 141

随筆 2

志賀さんを訪ねて 152

安川加寿子 158

芦田伸介 164

小山清の死 169

苦笑いの別れ 178

随筆 3

電話騒動 184

名人戦 190

私の小説作法 193

舞台再訪 雲の墓標

リユーベックにて 201 196

随筆 4 童話

趣味のすすめ 206

蒸気機関車の魅力 225

きかんしゃ やえもん 230

紀行文

山本元帥、阿川大尉が参りました

装幀・前川 直
キリエ・東 君平
口絵写真・大森堅司

小 說

夜の波音

海は、眠った町を守りするように、夜じゅう鳴りつづけていた。

繰り返し繰り返し、心を滅入らせるような単調なしらべだが、其の単調さの中に、一とふしずつの区切りがあつて、或いは高々と強く打ったまま、短く尾を曳いて消えて行く波があるし、或いはゆさゆさと大きく来て、長々とたゆたつて、消えかけて又一としきり鳴って行く波がある。じつと耳を傾けていると、波の音で、うねりの高さや、夜の磯に銀色にくだける波の形が目に浮かぶようだ。

時おり、下り列車の長い車輛の響きが海の音を掻き消して、山の鼻と山の鼻との間を過ぎて行くが、それが遠ざかるにつれて、波の音は又夜の静寂さの底から湧いて来た。

度々眼をさまして、横江は海の鳴る音を聞いていた。一人息子の昭夫は、隣りの四畳半で、若若しい健康な寝息をたてて、よく寝入っている。

夫を喪つてからまる二十年、父が亡くなって七年、容色のさかりは早く過ぎ去つて、残りの香がどれだけ匂うにしても、あと指折るほどもない年月で老いの道へ入って行くであらう自分の身の上が、榎江には不確かに思えてならなかった。明け方まで、心にかぶさるような波の音は、彼女の夢見るともない浅い夢を、始終やぶつた。

朝が来て、小鳥が樅の木の繁みの中で眼をさまし、花作りの家のオート三輪が、カーネーションの荷を積んで動き出し、国道に東京がよいのトラックの音が繁く聞こえ出すと、海の鳴る音は、もう榎江の家までは届いて来なくなる。朝陽が出、家々は一日の支度に活き活きと動き出し、海は町の夜番をやめる。

彼女は自分の身体の温みのやわらかくもった床をそつと抜け出して、昭夫を起こさぬように静かに手水を使い、昨晚簞笥の前の乱れ箱に、たとうに包んだ儘出して置いた今日の衣裳に着更えた。簞笥の上には、此の日七年の忌を迎える父親の写真が額に入れて掛けてある。

晴れた美しい朝だった。湿った黒い土に、麦は三寸ばかり伸びていた。切通しの道は、片側を花の咲いた桃の木に彩られて、鉄道線路の土手は、未だ緑を見せぬ萱が、一面に陽を浴びている。墓地はすぐ其の先の高みにあった。榎江にとってはそれ程親しみ深い土地ではないが、亡くなった彼女の父、昭夫の祖父には、これが故郷の村である。

田舎道は国道に合すると、東へ走って川を越す。橋の上からは、川口にじかに寄せて来る浜波が高々と見える。川を越せばすぐ駅で、駅前のタクシー屋は、通勤者には殆ど用が無いので、朝

はおそく迄寝ている。

此の町には北川姓が多い。タクシーも、駅の横の蕎麦屋も、国道の八百屋も皆北川だが、横江の家とどういふ古い縁つづきになるか、彼女は知らなかったし、往き来はなかった。

横江の父の北川健太郎が、昔此所に住んでいた頃には見られなかった筈の、大勢の学生や通勤者の群が、朝は此の小さい駅の改札口を通過して、隣接の市と東京とへ通って行く。

大阪から法事に出て来た横江の妹が、急行停車駅から引返して、人の群にせかれ乍ら駅を出、中々起きないタクシー屋のガラス戸を叩いている頃、横江は家で、廊下を拭き清め、部屋々々の掃除を済ませ、玄関に打ち水をして、今日の客を迎える準備で一人立ち働いていた。

横江たちの父、健太郎は、昔は、ち、前後の時に、横浜の町で偶然見識った外国船の司厨長に気に入られ、懇望されて其の船に乗り組み、三年間見よう見真似で覚えさせられた腕を元に、のちに震災後の東京に出て西洋料理屋の店を開いて成功した。

同じ村の出で皿洗いから育てた清吉と、やはり村の出で箱根のホテルにいた浜村と、此の二人の雇い人を健太郎はよく遇して、食べ物商売としては珍しく、長年人の入れ替えなしに、浜村を番頭格にして着実に成績を上げて行った。其の日其の日の新鮮な材料とにらみ合せて、自分の納得行くだけの品数と、眼の行き届く量だけしか作ろうとはしなかったので、派手な宴会料理には向かなかったが、それが却って人の口から口へ評判を高めて、墨田川の向こうには珍しい本式の

洋食屋として、銀座辺からわざわざ車を廻して食いに来るような客も、いつか少なからぬ数になつていた。

浜村は、「親爺ッさんに今、もう少し野心があれば店は大きくなれるがな」と洩らす事もあつたが、健太郎は、多少の資産が出来てからも、一向店構えを更めようとはせず、其の上、西洋料理を食いに來て妙に斜に構えているような客や、通ぶつて嵩に掛つて来るような客を嫌い、その為には、然るべき筋から眼をかけて貰うような機会も、多分何度か失つていたようであつた。

或る政党の大立物と云われた人の妾宅から、或る時、大事の客をするのだから、特選の挽き肉を、特にお前の店から届けてくれと頼まれた事がある。

「何を作んなさるのか知らんが」と云つて、健太郎は自身で丁寧に二度挽きした牛肉を小僧に持たせてやり、其の頃の値段で百匁七十錢頂きますと云うのを、

「うちでは百匁七十錢の牛肉は食べないから」と云われたと、小僧はしょげて帰つて來た。

彼は「よしよし」と云つて、包み紙だけ新しくし、

「どうも失礼しました。少しお高くなりますが、百匁一円五十錢頂きます。挽き肉としては手前共では使い切れない最高品ですから、これなら多分お氣に召しましょう」と口上を教えて、もう一度出してやつた。後日、

「流石にいい肉で、作つたものにもく、が、出て、客も皆満足して歸つた」と其の政党の妾宅では云つていたというのを聞いて、健太郎は、

「馬鹿な客だ」と笑っていた。多少の得意もあつたのであろう。其の頃が彼の店の盛りであつた。

時世のよかつた其の時分には、健太郎の店と、それから三四町離れた居宅とは、何彼につけて親戚縁者の足だまりであつた。娘が二人、猫が二匹、いつも何かしらハイカラな食べ物があつて、花やかな賑やかな空氣のこめていた健太郎の所は、誰もが腰を長びかせたくなるだけの魅力を持っていた。

幼い姪や甥たちが店へ来て、何を御馳走してやろうかと云えば、

「じゃあ、苺クリーム」と、お食後用の温室苺を註文するのを、

「一番高いものを知つてやがる」と、それでも健太郎は、瘦せぎすの身体を脚の高い調理場の椅子に乗せて、客の暇な折には、にこにこし乍ら出してやるのであつた。

子供客が多いと、彼の家は娘たちと子供たちの騒ぐ声で、廊下も台所も満ちあふれそうになる。甥姪たちというのは、主に、健太郎の弟の峰三郎のところの子供等で、峰三郎は子供等を寄越して食べるだけ食べさせて置いては、三度に一度の割で兄の所へ何かしら大きな話を持って顔を出していた。

此の弟は、株屋の才取りを振り出しに、怪しげな金融会社の仕事に一枚加つたり、犬屋の片棒をかついだり、四十近くなつて定つた職がなく、それで口だけはどこ迄信用出来るのか分らない景氣のよさで、有力な出資者があるから店を日本橋辺に進出させてみないかとか、或る宮家の宮

さん方の集りに、定期的な出張料理を請負ってみないかとか、とかく自分も一と株乗って、店の経営に横から口を入れたような話を、いつも持込んで来るのだった。健太郎は真面目には相手にならず、子供たちは可愛がっても、其の父の峰三郎の出入りは快く思わなかった。

「あいつの下手な思惑で、此の店を巻添えにされてしまう。店を自分流に楽しめなくなるのは真ッ平だ」と彼は云っていた。

健太郎の妻は、店が盛りのその頃に、二人の美しい娘を残して肺炎で亡くなった。過労で風邪をこじらしたのがいけなかったと云われた。姉の榎江が十八で、妹の和代が十五の時である。

肌が白くていつも薄化粧をしているようだと言われた美しい榎江は、其の時分、いずれは十二ちがいの浜村と結ばれて、店の跡を継ぐものと人に思われていた。彼女は父が眼をかけている店の二人の若者には、何の気兼ねもなく、

「浜村ア」

「清吉イ」

と、呼び捨てで幼い頃から親しんで、殊に浜村には、学校でのぼせている綺麗な上級生の事でも、憎らしい助平の体操教師の事でも何でも云える仲で、映画を見て夜おそく帰った言訳も、夏休みの宿題もすべて押しつけていた。母が亡くなってからは一層、いい年をし、大きな身体をして芝居を見に行く着物の着つけにまで、羞ずかしげもなく浜村の手を求めた。

一方浜村の方でも、主人の綺麗な娘から、ねんね振り丸出しで我儘を云われるのは決して悪い氣持ではなく、よくあれこれと氣を配って面倒を見てやっていた。妹の和代は、少女心にやきもちをやく事があった。

しかし榎江は、母が亡くなってから三年して、人の思惑に反し、不意に全く違う所から養子をもたらした。亡くなった母親が、夜のおそい不規則な、氣疲れの多い客商売よりは、娘たちにはきちんとした勤め人の生活をさせてやりたい、金銭的な援助は自分たちが蔭ひなたになってしてやればいいのだからと、生前口癖に云っていたのが、健太郎の氣持をそう決めさせたようであった。

榎江は父の意向を素直にきいて、人形のような花嫁ぶりで式を挙げた。

それから間もなく、浜村も嫁を貰い、清吉も結婚し、和代は大阪へ嫁して行った。健太郎は、娘と浜村との仲を、それ程重くも考えなかったが、さりとて完全にすっきりとも思えなかったらしく、それから後は、前に増して浜村には、仕事の上で眼をかけるようになった。彼は、

「此の店の看板は、浜村がつぐ氣があればその時でどんなにでも相談に乗るが、さもないければ、舌先の勘が人にゆずれもんじゃあない、自分が好きで始めた商売は、一代かぎりでもいいさ」と、店の跡にはそれ程執着していなかったが、浜村の事だけは特別にして考えているようだった。店の事では又、

「こんな商売をしたばかりに、女ざかりのいい目は見ずに、生命を縮めたと、お母さんは墓の